

小島正憲

最近、中国は「世界の市場」や「世界第2位の GDP を誇る経済大国」として、メディアに登場している。

そしてそれに煽られた新米企業の中国進出ラッシュが、激増している。さらにそれにターゲットを合わせたようなハウツー本が、たくさん発刊されている。今回はそれらの一部を、著者の年齢順に取り上げてみた。

1. 久野勝邦:71歳 2. 吉村章:50歳 3. 大羽りん:43歳 4. 秋山謙一郎:40歳 5. 加藤嘉一:27歳

1. 「中国人と日本人」 久野勝邦著 早稲田出版 4月17日

副題：「グローバル環境への対応」

帯の言葉：「我われの隣国にはもっとも分かり合えない人たちが住んでいる」

この本で久野勝邦氏は、「中国語の言語としての限界」をキーワードにして、中国人の分析を進めている。この手法は画期的で、その論は傾聴に値する。また久野氏はアングロサクソン論にも通暁しており、本文中に数回出てくる日本人・中国人・アングロサクソンの3者の対比は、刮目に値する。忙しくて本を読んでいるヒマのない人は、図書館で本書の末尾に掲載してある「付表：中国人と日本人の比較」を探しコピーしてもらって、それを熟読玩味するだけでも面白いと思う。ぜひ本書を読んでもらいたいので、私の下手な解説を省略したいのだが、以下にそのさわりと重要部分を紹介する。

私は今後、久野氏の下記の切り口を参考にしながら、中国や中国人を把握し直してみたいと考えている。このような考え方をすると、今まで中国人の言動の中の不可解に感じられた点が、解析可能になってくる気がするからである。

- ・「中国について考える場合に、第一の着眼点は中国語である。中国語の最大の問題点は、言語の表記が表意文字でしかできないことにある。そして漢文は一部の知識階級しか理解されず、書いてあることの解釈さえも誰かの教えなくては理解されない状態であり、広く自分の意思を伝達する手段として普及するには、困難を伴う」
- ・「過去と現在の区別がなく、文法とか時制表現の方法も曖昧な中国語。前置詞・副詞・動詞など、品詞の区別も曖昧で、関係代名詞もなく、接続詞も少なく、同氏の語尾変化による多様な表現もない中国語。複雑な論理は例をあげて相手に伝えるしかない中国語。これらは中国人にとっては日常の経験であるが、外国人から見ればきわめて非論理的な言語体系である。したがって、一般中国人が論理的な思考に慣れていないのもやむを得ない」
- ・「加えて中国語には四声がある。音声の高低は、音楽に見られるごとく、感情の緊張・高揚を呼び起こし、感情を殺して冷静に論理を伝達することの難しい言語である。論理や事実よりは、一方的な断定口調で感情的に、結論を押しつけようとする中国人の特徴もここに由来している」
- ・「中国という国では、漢字という制限があり、宗教観のような目に見えない考え方・思想を一般に伝えることができず、西欧・日本で広まっているような人々の間の一体感を生み出す共通の宗教観に到達することは不可能のようである。一般的に中国人は五感で理解できること以外は信じず、自分が死んだ後のことまでは、通常考えないといわれている」
- ・「日本人から見ると、中国人は論理が理解できない御しがたい人たちと見える。論理が伝達しにくい分だけ、相手の感情を読み取ろうとする涙ぐましい努力が見られる。論理を重視した法治主義ではなく、この国では人と人の感情的なつながりを重視する人治主義しかありえないことも理解されるはずである」
- ・「中国人には、革命の排外攘夷のような破壊的な行動を愛国的として好み、日本人のように言葉を大事にして法と秩序を守る人間を嫌い煙たがる傾向がある。孫文がかつて中国人は“一盤散砂”、つまり砂のようにバラバラな民である嘆いたが、漢字の民族は結合が難しい。一枚岩の団結を維持するには、あくまで対外的な恨みを醸し出さない限り、中国人のアイデンティティの確立ができないわけである」
- ・「中国人は長い歴史の間に、激しい圧迫を受け続け、精神的に大変な苦しみを味わい続けてきたが、中国人には宗教と呼べるものがなく、いつの頃からか“法螺”を吹くということが一種の精神安定剤になっていたとされる。好んで、“法螺”を吹くという中国人の習慣に対して、その楽しみを守ってあげることが、“面子を潰さない”ということである。面子の裏にある真実を暴かないというのが、社会生活において絶対に欠かしてはならない“マナー”になっているといわれる。万一、権力者の面子を潰すようなことになれば、命も危ないことになる。中国人の“面子”と“法螺”は一对になった概念とのこと」
- ・「このような“面子”という言葉に表れた中国の形式主義や、“面子”というものを中心にした権威主義は、中国的無神論の当然の帰結とも言われているが、これしか社会の秩序・安定を維持する方法はないわけである。中国人は、日本人から見れば空虚とも思える“面子”によって生きており、“面子”こそが中国精神の真髄ともいわれている。そのような中で、儒教(儒学)というものが、どのような“面子”を維持すべきかを教えるものと考えると分かりやすい」

※上記の“面子”に関する分析を、次項で取り上げる吉村氏の論と比較してみたい。

2.「中国人の面子」 吉村章著 総合法令出版 6月2日

副題：「知っておくと必ずビジネスに役立つ」

この本で吉村章氏は、中国人がいかに関面子を大事にする人種であるかを、面子を3種類(網面子・貸し面子・義の面子)に分けて捉えるという同氏独自の分析手法を使い、詳細に書いている。少し回りくどいが、参考にはなる。この本の中で私は、「緑の帽子を男性に贈呈してはならないし、自分がかぶって外出してはならない」ということを、初めて知った。吉村氏の解説によれば、「緑の帽子は、恋敵にガールフレンドを奪われた不甲斐ない男を意味する」からだそうである。幸いにしてこの20年間、私は緑の帽子を他人に贈呈したこともなければ、かぶったこともなかったのも、このくだりを読んでいてほっとした次第である。

この本にはやたらと「中国人との酒の飲み方に対する注意やら極意」が出てくる。タイトルを「知っておくと必ずビジネスに役立つ、中国人との酒の付き合い方」としても良いのではないかと思うほどである。「知っておくと役立つ“お酒の席”の豆知識が、①から⑤まであり、「お酒の席での注意点」などや、吉村氏自身の酒の席での武勇伝も紹介されている。それなりに参考にはなるが、吉村氏は酒豪のようなので、酒が嫌いな人や飲めない人の心情や立場は理解できず、その人達へのアドバイスは書かれていない。中国人にも1割ぐらゐは酒が嫌いな人がいるし、最近では健康上の問題があつて酒を控えている人も、多く見受けるようになってきた。できれば吉村氏にはそのような場合のフォローの仕方まで、書いて欲しかった。私は体質上まったく酒が飲めないのも、中国でも酒をまったく飲まずにビジネスを展開してきた。その体験からいえば、酒席が下手でビジネスが失敗したということは皆無である。むしろ酒の飲み過ぎで大型商談をダメにした日本人をこの目でたくさん見てきた。私ならば、「とにかくビジネスは酒席に持ち込むまでに、決着を付けておけ」というアドバイスを書く。そして美味しく、楽しく酒を飲めばよいのではないだろうか。

3.「これだけは知っておきたい中国人の常識と非常識」 大羽りん著 武田ランダムハウスジャパン 4月20日

帯の言葉：「嫌いな人も好きな人もつきあわなくてはならない巨大な隣人」

著者の大羽りん氏は、「中国人の父と日本人の母を持つ」女性で、「中国人として生まれ、10歳までは中国人として育てられ、10歳からは日本人として教育を受け、生きてきた」、また「高校卒業後、北京師範大学の附属高校に短期留学し、中国語を再度学び…」、その後通訳や翻訳の仕事に従事し、現在ではその仕事を中心にして起業し、代表取締役として活躍中であるという。その点では、日本人としての感覚で、中国人の常識や非常識を心底から捉えるにはまさにうってつけの人材であろう。大羽氏は日中関係を男と女の恋愛関係に似ている気がすると書いているが、面白い表現である。

大羽氏は、中国人の本音として、「“日本人と商売するのは(コップを傾ける仕種をしながら)”これがあるからいい。欧米人は付き合いが悪くてね。飲んでくれないから、あまり本音を出さないんだよ」と書いている。私は欧米人の酒の飲み方についてあまり詳しいとは言えないが、たしかに日本人の方が付き合い易いと思う。また中国では恐妻家が多く、「奥さんの尻に敷かれている男性の意」を示す言葉の発音と「気管炎」の発音が同じため、酒宴などでは「妻の管理が厳しい男性」には、「気管支炎」ですかと問いかけるとその座が盛り上がるという。面白いことを知ったので、今度、私も酒宴で使ってみようと思う。また色についての解説の中で、上掲吉村氏と同じく、ここでも「緑色の帽子をかぶると言えば、妻が不貞を働いた」という意味の隠語である」と書いている。やはり男性にとって緑は禁物なのだとことがわかった。

しかしながら大羽氏には、もう少し日中双方の歴史や習慣、人間心理、現状などについて、深く勉強してもらいたいと思う。たとえば中国人には「日本刀」からは「殺戮のイメージ」しか浮かばないので、日本の観光名所ではそれらの展示などに留意して欲しいと書いているが、台湾の台南の鄭成功記念館には、「日本刀」も「日本の甲冑」も堂々と陳列してある。なぜなら明の遺臣・鄭成功は日本人傭兵を最前線で、清の軍隊と戦わせたからである。日本人の武士が明のために戦い、そのとき使用した日本刀がそこに展示してあるのである。台湾の観光名所に展示してあるものが、なぜ日本で展示されてはいけなのだろうか。その他、この本の中には、同様の知識不足の部分がかなりある。

また大羽氏も、孔健氏についての解説の中で、「孔子直系の第75代目子孫」として紹介しており、私と同様の誤認をしている。

4.「いまこそ知っておきたい！ 本当の中国経済とビジネス」 秋山謙一郎著 秀和システム 3月2日

秋山謙一郎氏は、「その歴史から大国といわれる中国は、これ(GDP 世界第2位になったという事実)により、経済でも、名実ともに大国となった」と書き、「砂上の楼閣」である中国経済を大国と誤認し、日本人や日本企業に大国中国への進出を扇動している。また「中国は世界第1位の人口で“人手不足”なし」と主張し、「人手不足下のストライキ多発」という現下の中国のひどい状況をまったく知らない。また「中国はいまだ手つかずの巨大な市場」などと、すでに数年前に市場は飽和状態であることを、これまたまったくご存知ない。秋山氏のこの本だけ読んでみると、中国には金儲けのチャンスがごろごろしており、どんな日本企業が進出しても、やすやすと成功するような気になってしまう。もし中国が、秋山氏がこの本で書いているように、ビジネス面で魅力的な国ならば、進出した多くの日本企業が故郷に錦を飾り、凱旋している

はずである。ところが現実には、進出した日本企業には失敗して撤退した企業の方が多い。中国での企業の経営環境を手放しで礼賛するような、この本を読んでみても、「本当の中国経済とビジネス」はわからないだろう。

5.「常識外日中論」 李小牧・加藤嘉一著 メディア総合研究所 4月25日

帯の言葉：「“非常識”が語る日本と中国の“新常識”！！」

この本は、中国のメディアで超有名な日本人の加藤嘉一氏と、日本の歌舞伎町で有名な中国人の李小牧氏との対談である。李氏は前書でこの本を、「日本人が外から見た日本人論、中国人が中から見た日本人論」と紹介し、「日本人論、中国人論、日中関係論である。このような本は今までになかった」と自画自賛している。しかしながら、その割にはレベルが低く、刮目させられるような論は少ない。ことに李氏の論には、中国人らしいギラギラしたものを嗅ぎ取ることはできても、かぐわしい文化の香りを感じ取ることはできない。

李氏は、「私は中国を変えたいんです。そのためには外国にいて、祖国を客観視する必要があると思った。外国からだ中国の良いところ、悪いところがよく分かるんです」、「(中国の)一党支配を変えて、民主主義にしたい。私は共産党員にはなれないので新たな党を作りたいですね」と話しているが、そのための具体的な活動については一言も触れていない。かたや加藤氏は、「自分がこうやって中国での言論活動やっているのも、僕が発言することによって、中国の人の対日感情が良くなること、中国の人がより柔軟性を持って日本を理解することができることを目指しているんです。それによって日本の企業は絶対儲かると思うし、日本の対中外交もやりやすくなると思う。だから僕がやってるのは、全て日本のためですよ」と語っている。これを読めば、明らかに若い加藤氏に軍配が上がる。

加藤氏は、「僕は国を離れてみて初めて日本のことを誉められて嬉しいと思ったし、初めて日本のことを批判される悔しさを知りました。これって健全な愛国主義ですよ。愛と憎しみじゃないですけど、祖国に良いところ、悪いところを指摘して初めて愛国者なんです。それこそコスモポリタン、インターナショナリズム、国際主義ですよ。あの毛沢東が、“愛国主義というのは、国際主義といっしょになって初めて健全なんだ”と言う言葉を残していますが、これは今の時代も変わらないと思います」と話している。私は加藤氏の「健全な思考」に同感である。

加藤氏は、「僕がすごく感じるのは、今の日本の国情は比喻的な表現で言うともう戦前です。ずっと不景気で若者は行き場のない憤りを内に溜め込んでしまっている。そんな中、そんな中、カリスマ性のあるリーダーが出てきて強攻策を取ったらと思うと恐ろしい。それは中国も同じ。行き過ぎた国粋主義が蔓延していてナチスじゃないですけど、ファシズム恐慌的な状況ですよ。仮に中国のバブルが崩壊して経済的に厳しい状態になり、国民の不満が爆発すれば、明らかに間違っているって分かっているにもかかわらず、中国のリーダーは国民に迎合して、煽ることによって自らの権力基盤を高めようとする。これってファシズムですよ」と語っている。これまた、私は若い加藤氏の鋭い洞察に同感である。

現在、加藤氏は中国メディアで大もてである。もちろん加藤氏も中国での発言には、かなり神経を使っているという。文中ではその注意事項を4つに分けて説明している。加藤氏は頭脳も明晰である上に、中国も流暢であり、発言も慎重である。これだから中国メディアに受けるのだと思う。ある意味では、中国メディアが加藤氏をガス抜きに利用しているとも考えられるが、それでもこのような日本人の若者が中国のメディアにいつも登場し、活躍することは喜ばしいことであると思う。

以上